

## 『虞美人草』と『マクベス』の雨

Junko Higasa 2013.9.28

『ハムレット』の家に例えられた『虞美人草』甲野さんの家。この最終章に私は同じシェイクスピアでも、漱石が得意として人気を博した講義『マクベス』を見る。嵐のような雨の中に集まって、それぞれの人生が決まる場面はまるで『マクベス』第一幕第一場の情景と、そこで交わされる三人の魔女たちの会話のようではあるまいか。以下に原文と拙訳を記す。

荒野の雷・稲妻・雨の中【When shall we three meet again? In thunder, lightning, or in rain?】【When the hurlyburly's done, When the battle's lost and won.】【That will be ere the set of sun.】【Where the place?】【Upon the heath.】【There to meet with Macbeth.】【I come, Graymalkin. Paddock calls.】  
【Anon.】【Fair is foul, and foul is fair: Hover through the fog and filthy air.】

【いつ落ち合おうか？雷、稲妻、それとも雨の時？騒動が鎮まった時、勝敗が決まった時。やがて治世が定まるよ。どこで？ヒースで。そこでマクベスに会おう。行くよ、老いぼれ猫、ヒキガエルが呼んでいる。すぐ行くよ。まことしやかなものは邪悪で、邪悪なものはまことしやかなものだ。困惑の霧と下品な態度で汚れた空中を飛びまわれ】この言葉に私は藤尾の母を思い出す。漱石の描く 20 世紀の態度のようである。因みにイングランドの荒れ野に咲くヒースの花もまた「虞美人草」と同じ赤や紫である。